

環境コミュニケーション

2021年8月23日（月）、京都大学、日本たばこ産業株式会社、日本ガイシ株式会社との意見交換会をオンラインとオンサイトのハイブリッド形式で実施しました。

これまで岐阜大学と名古屋大学は、環境活動のさらなる発展や環境報告書の充実を目的に、4年連続で他大学との意見交換を実施してきました。（P.7参照）今回は、東海国立大学機構として初めての開催となりましたが、3大学の学生に加え今回は企業の方も参加することで活発な意見交換となり、大変有意義なものになりました。

京都大学では、環境配慮活動計画のもと、電力のみえる化や各部局が拠出する環境賦課金等を活用した施設・設備の省エネルギー対策事業を計画的に実施していました。また、教職員と学生で構成される団体である「エコ〜るど京大」の活動では、SDGsに関する情報についてオンラインを活用して積極的に発信していました。

最後に、日本たばこ産業株式会社の担当者からは「環境報告書を読んで自分の行動につなげてもらいたい。企業側も地域貢献として参加させていただきたい」、日本ガイシ株式会社の担当者からは「学生が議論することや他大学の学生と交流する場は貴重で、これを機に互いが継続的に交流されることを期待したい」との感想をいただきました。

いただいたご意見は、本報告書に反映できる点は速やかに反映し、その他のご意見は次年度以降の環境報告書ならびに環境活動のさらなる発展に役立てていきます。



参加者

京都大学 大学院地球環境学 浅利美鈴准教授と学生3名
日本たばこ産業株式会社2名、日本ガイシ株式会社1名
東海国立大学機構21名（岐阜大学13名、名古屋大学8名）

評価いただいた内容

- 研究の記事が多く掲載されていて、大学の活動が分かりやすい。
- 学生サークルや学生活動の記事が充実していて、ユニークなアイデアで活動をしていることが分かる。
- 学生インタビューや学生の感想の掲載が多いのは好印象だった。
- 高校生にも読みやすいよう、構成や紙面が工夫されている。

改善提案を受けた内容

- 環境マネジメントデータに掲載しているデータの単位違いの指摘があった。
- 廃棄物排出量やリサイクル量が掲載されているが、内訳の記載があると今後の対策につながるのではないかと。
- オンライン授業の導入や事務のペーパーレス化で、紙類の使用は減少していることから、その変化をグラフ化すると分かりやすい。



京都大学
環境報告書2021



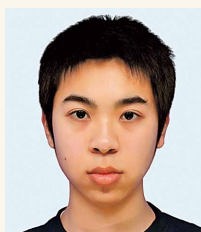
東海国立大学機構
環境報告書2021

参加学生のコメント



この度こうした交流会に初めて参加させて頂き、環境問題に対して真剣に取り組んでいる方々の熱意に触れ、大変刺激を受けました。アイデアが研鑽され、活動に推進力がついていく様を目にし、交流することの重要性を肌で感じました。これからは自分から発信することを恐れずに、今回得た繋がりを大事にして、積極的に行動を起こしていきたいと思います。

▶ 岐阜大学応用生物科学部1年
三村友里菜



東海国立大学機構と京都大学の環境報告書を比較話し合うことで、報告書の良い点や改善点を知ることができました。京都大学の「勝手に集中講義」や「今日も明日もSDGs!」という取り組みは構成員だけでなく、地域に住む人達にとってもSDGsを身近に感じるよい機会となると感じ、このような取り組みを私たちも行っていきたいです。

▶ 岐阜大学工学部2年
大石雄暉



岐大、京大で行われている環境に関わる研究の内容について知ることができ、自身の環境に対する意識がより強くなっただけでなく名大祭実行委員としても来年度の活動で生かせそうな意見を聞くことができとても有益でした。

▶ 名古屋大学工学部2年
馬淵晴



他大学で行われている活動を知ることができる貴重な経験でした。また、他大学からみた本学の活動についても知ることができ、学ぶことがたくさんありました。今回得た多くの知見をこれからの活動に還元していきたいです。

▶ 名古屋大学工学部3年
池ヶ谷泰成



エコ〜など京大さんの全員参加を目指した活動は、私たちが課題とするところでも参考になりました。コロナ禍で自由に活動が出来ない中でも、オンラインなどを活用して仲間の輪を広げている点を見習っていききたいと思います。

▶ 名古屋大学農学部4年
大槻峻介

編集長対談

[2021年8月23日(月) オンライン開催]

● 櫻田(岐阜大学)

今回、東海国立大学機構(以下、機構)として、はじめての2大学で1冊の環境報告書を作成しました。岐阜大学(以下、岐大)と名古屋大学(以下、名大)のそれぞれの紹介を綴るだけ、とするのではなく、機構としてのまとまりを示すことが少しはできたかなと思っていますがいかがですか?

● 林(名古屋大学)

櫻田先生と共同編集長という形で、両大学共同で作成させていただき、いろいろと学ばせていただきました。お互いの大学の実情を知ることができたのも成果だと感じています。環境報告書はコミュニケーションツールだと思っていますが、今回身をもって体感しました。

● 櫻田

今回、機構長×副機構長対談(P.2~5参照)、名大と岐大の学生同士の対談(P.56・57参照)のほか、名大の学生が岐大の先生に、岐大の学生が名大の先生にインタビューするという「クロスインタビュー」(P.26・27, P.30・31参照)など、機構になったからこそできる企画もたくさん実行できましたよね。

● 林

インタビューを受けた先生方も刺激を受けたとおっしゃってくださいました。多くはオンラインでの実施になりましたが、コロナ禍だからこそ、できる限りコミュニケーションをとることや対話形式を取り入れることなど、「顔の見える紙面」づくりも意識しました。

● 櫻田

学生さんたちの参加も重視していますよね。私たちの環境報告書は名大、岐大の時から、高校生にも読んでみたいと思ってもらえるような紙面構成を目指していましたので、若い学生さんたちの視点はとても重要です。

● 林

学生さんたちの力にはいつも感服させられます。学生の活動紹介(P.47, P.52~57参照)を見た高校生が是非、参加したいと思ってもらえるようにですね。

一方で、機構としての環境についての指針をまとめることできなかったことなど、まだ道半ば、という点もあります。



林瑠美子名古屋大学編集長(写真左) 櫻田修岐阜大学編集長(写真右)

● 櫻田

苦労もありましたね。とはいえ、コロナ禍でオンラインでの打ち合わせがほとんどという状況にもかかわらずまとめることができたのは、2017年から「環境コミュニケーション」として両大学を中心として幾つかの大学に参加していただいて環境報告書についての意見交換会を毎年実施してきたことが実を結んだと言えると思います。(P.7参照) これまで参加していただいた静岡大学、三重大学、浜松医科大学、それに今回、参加していただくことができた京都大学の皆さんにも感謝しております。

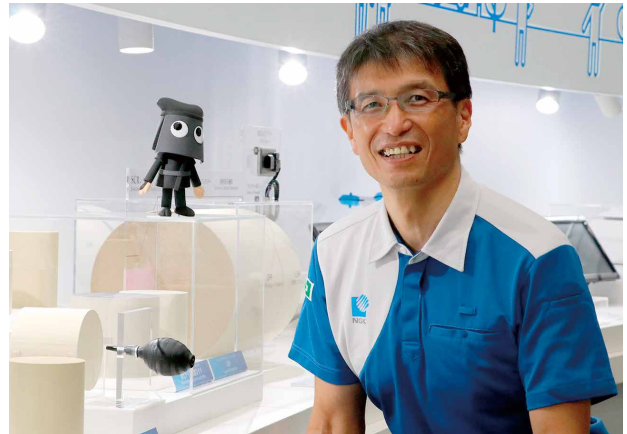
● 林

元々協力関係が構築されていたことは大きいですね。今後も、学内外の皆様方との対話を重ねながら、環境報告書だけでなく環境マネジメント体制も改善していけたらと思っています。

● 櫻田 ● 林

機構になってはじめての1冊の環境報告書の作成に学生・教職員だけでなく、学外の多くの方々の協力もいただきました。ここに感謝いたします。この冊子をコミュニケーションツールの一つとして考えていただきまして、今後もよろしくお願いいたします。

日本ガイシ株式会社
ESG推進部
部長 野尻 敬午 氏



こうして東海国立大学機構としての記念すべき環境報告書第一号の第三者評価ができることを大変光栄に思います。企業で環境課題に取り組む立場から報告書を読んで感じることを述べたいと思います。

まず、表紙がとても素晴らしく象徴的だと思いました。二つの大学が融合することで雷鳥がいる高山、河川や野山、豊かな海、さらには大都市圏があるなど多様な環境下に貴機構が立地していること、さらにはそれらが地球規模の環境の多くをカバーすることから、貴機構の環境課題への取り組みに対する優位性を感じました。それは、機構長×副機構長対談のタイトル「地域とともに世界の環境問題解決に挑む」に通じます。

今回、二つの大学の環境報告書が統合されました。そこには多くの工夫が見て取れます。貴機構としての取り組み、それぞれの大学独自の取り組みが分かりやすく提示されています。貴機構としての取り組みは、クロスインタビューなどの工夫も含めて、実働が伴っていることがよくわかります。特に、環境管理体制として二大学の上位組織として統括マネジメント部門が設置されたことは大きく評価できます。岐阜大学と名古屋大学それぞれのマネジメントは異なっていて一見ばらばらのように思えますが、独自性は大事にしてほしいと思います。その違いからくるものを改善に結びつけられる強みも貴機構ならではのところからです。その点では「カーボン・ニュートラル達成に向けた大学等の貢献に係る学長等サミット」で表明された貴機構のビジョンは、二つの大学が融合しつつ独自の課題をもって進めることがよく表現されていると思います。一方で、環境方針は二つの大学の方針を挙げたにとどまっている印象を持ちます。上位概念として貴機構のビジョンあるいは方針が明

示されるとなおいよいよ思いました。それにより、それぞれの大学の活動内容や定量的な目標設定がなされるなど、貴機構全体の環境行動のレベルアップにつながるのではと思います。今後ご検討いただけることを期待します。

日本ガイシは、「100年前からSDGs発想」で事業展開を進め、本年4月に次の100年を見据えたうえで2050年に向けて「グループビジョン」及び「グループ環境ビジョン」を公表しました。環境ビジョンでは特に2050年までにCO₂排出ネット・ゼロを実現することなどを宣言しその活動を開始しています。その道のりは困難を極めるものと思います。一企業単独でできることは限られます。大学に期待するのは、主に研究と教育です。本報告書においても多くの興味深い研究事例が挙げられています。また、アカデミック・セントラルに代表される教育では、高水準の次世代企業人の育成などが期待されます。独自性を持った岐阜大学と名古屋大学、および融合した機構の取り組みによって貴機構の環境活動がより活性化することを願っています。



▶ 日本ガイシ株式会社ホームページ
<https://www.ngk.co.jp/>



▶ NGKグループサステナビリティ
<https://www.ngk.co.jp/sustainability/>



記載ページ		記載ページ	
第1章 環境報告の基礎情報		10. 事業者の重要な環境課題	
1. 環境報告の基本的要件		(1) 取組方針・行動計画	18
(1) 報告対象組織・対象期間	6	(2) 実績評価指標による取組目標と取組実績	19
(2) 基準・ガイドライン等	67	(3) 実績評価指標の算定方法・集計範囲	
(3) 環境報告の全体像	6	(4) リスク・機会による財務的影響が大きい場合は、それらの影響額と算定方法	
2. 主な実績評価指標の推移		(5) 報告事項に独立した第三者による保証が付与されている場合は、その保証報告書	
(1) 主な実績評価指標の推移	58~63	参考資料	
第2章 環境報告の記載事項		(1) 温室効果ガス排出(スコープ1, スコープ2, スコープ3排出量)	
1. 経営管理者のコミットメント		(2) 温室効果ガス排出原単位	58~60・63
(1) 重要な環境課題への対応に関する経営責任者のコミットメント	1~5・18	(3) エネルギー使用量の内訳及び総エネルギー使用量	
2. ガバナンス		(4) 総エネルギー使用量に占める再生可能エネルギーの使用量の割合	
(1) 事業者のガバナンス体制		2. 水資源	
(2) 重要な環境課題の管理責任者	16~18	(1) 水資源投入量	
(3) 重要な環境課題の管理における取締役会及び経営業務執行組織の役割		(2) 水資源投入量の原単位	61・63
3. ステークホルダーエンゲージメントの状況		(3) 排水量	
(1) ステークホルダーへの対応方針	8~13	(4) 事業所やサプライチェーンが水ストレスの高い地域に存在する場合は、その水ストレスの状況	
(2) 実施したステークホルダーエンゲージメントの概要	36~39 44~57	3. 生物多様性	
4. リスクマネジメント		(1) 事業活動が生物多様性に及ぼす影響	
(1) リスクの特定、評価及び対応方法	16~17	(2) 事業活動が生物多様性に依存する状況と程度	
(2) 上記の方法の全社的なリスクマネジメントにおける位置づけ	46	(3) 生物多様性の保全に資する事業活動	39・48 51~53
5. ビジネスモデル		(4) 外部ステークホルダーと協働の状況	55
(1) 事業者のビジネスモデル	1~5・14~15	4. 資源循環	
6. バリューチェーンマネジメント		(1) 資源投入量(再生不能・再生可能)	
(1) バリューチェーンの概要		(2) 循環利用材の量	58~63
(2) グリーン調達の方針、目標・実績	61	(3) 循環利用率(=循環利用材の量/資源投入量)	
(3) 環境配慮製品・サービスの状況		(4) 廃棄物等の総排出量・最終処分量	
7. 長期ビジョン		5. 化学物質	
(1) 長期ビジョン	1~5	(1) 化学物質の貯蔵量・排出量・移動量・取扱量(使用量)	62~63
(2) 長期ビジョンの設定期間	8~9	6. 汚染予防	
(3) その期間を選択した理由	18・60	(1) 法令遵守の状況	58~63
8. 戦略		(2) 待機汚染規制項目の排出濃度、大気汚染物質排出量	62~63
(1) 持続可能な社会の実現に向けた事業者の事業戦略	1~5・8~9・18・60	(3) 排水規制項目の排出濃度、水質汚濁負荷量	
9. 重要な環境課題の特定方法		(4) 土壌汚染の状況	61
(1) 事業者が重要な環境課題を特定した際の手順	16~17		
(2) 特定した重要な環境課題のリスト	19		
(3) 特定した環境課題を重要であると判断した理由			
(4) 重要な環境課題のバウンダリー			